

住吉地域の文化遺産 (住吉地域自治区管内)

【地域の歴史と特色】

旧宮崎市の北部に位置する住吉地域は、東は太平洋に面し、西には宮崎層群によって形成される、海拔100m内外の丘陵地が連なっています。

古代から中世にかけては、宇佐八幡宮の荘園として開発され、芳士を中心とする地域は新名爪別府、広原から島之内、塩路までの地域は広原庄にそれぞれ含まれました。

近世初期は、新名爪村・広原村・塩路村として佐土原藩領となりましたが、元禄3年(1690)に藩主島津惟久が従弟島津久寿に三千石を分知した際、広原村から島之内村、新名爪村から芳士村が分村し、塩路村・山崎村とともに久寿領(旗本領)となりました。

【文化遺産マップ】



はすがいけよこあなぐん

① 蓮ヶ池横穴群（国史跡）

宮崎平野の西辺の入り組んだ谷間の斜面に、現在82基の横穴が確認されています。

横穴には、盗掘や第二次大戦中に軍用に使用されたために加工を受けたものもありますが、玄室の基本形態は寄棟造の妻入りで、構築時の工具痕が美しく残っています。また、53号横穴では、玄室壁面に線刻壁画を見ることができます。

出土遺物には、須恵器の坏・高坏・甕片・土師器などの土器、鉄鏃・刀子などの武具・馬具類、勾玉・金環などの装身具などがあり、これらの遺物から横穴群が造られたのは6世紀中葉から7世紀にかけてと考えられています。



にいなづめはちまんじんじゃ

② 新名爪八幡神社

現在の新名爪・芳土を中心とする一帯は、豊前宇佐八幡宮の荘園、新名爪別府に比定される地域で、新名爪八幡神社は、その地域の鎮守として祀られました。土持景綱が地頭のとときに勧請したと伝えられ、古くは「土持八幡」と呼ばれていました。

神社に伝わる古文書に、天文年間（1532-55）の神事日記が伝わり、「御かくら（神楽）三日御座候」など、当時の神事の様子が記されています。この神楽は今に伝わり、元々33番あった演目のうち、6番を伝承し、毎年春と秋の社日に奉納しています。

また、社宝として、九州に3面（他に福岡県太宰府の観世音寺、大分県宇佐八幡宮）しか残っていないという木造の舞楽面陵王が伝えられています。縦30cm、横18cm、鼻の高さ13.5cmで、室町時代の作とされています。神社の氏子中では、「不老面」と呼ばれ、権威ある面として厚い崇敬を受けています。



舞楽面陵王（市有形文化財）

たんごじょうあと
③ 丹後城跡

丹後城跡は、蓮ヶ池横穴群の北側丘陵に位置します。『日向地誌』によれば、丹後山の東南端にあり、古くは三須丹後守という者の居城と伝えられ、永徳年間（1381-84、北朝年号）の土持氏家臣、三須石見守時信と同族ではないかと記されています。

標高65mの頂部付近に主郭と見られる平坦地があり、その東側に比較的明瞭な堀切を確認することができます。

ひろはらじんじゃ
④ 広原神社

江戸時代までは山王権現と称し、元の社は、現在地の西方約500mの字宮ノ下（通称鳥の迫）にありました。元来、広原地区の人々は、島之内の八幡社を祀っていましたが、元禄3年（1690）に島之内島津氏3千石が分知されると、極楽寺の山王社と神向の阿蘇社を合わせて、新たに平大明神と称する社を建立しました。その後、明治45年（1912）に現在地へ遷宮されるまでの約200年間は、春秋の社日の例祭をこの社で執り行いました。

現在、社日の例祭で奉納された神楽は、広原神楽として伝えられています。33番の番付の中には、アメノウズメノミコト扮する「中の手」やヤマタノオロチ伝説に因んだ「蛇切り」といった演目も見られ、岩戸系や出雲系神楽など、様々な神楽の要素が含まれています。

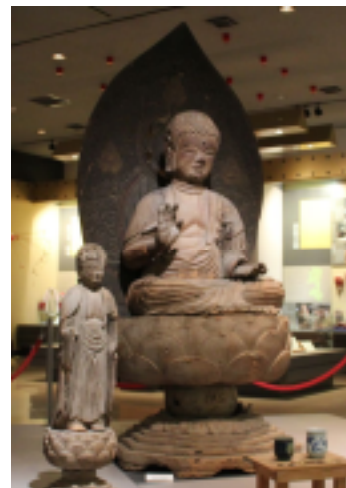


民俗芸能 広原神楽 ➡

こくらくじあと
⑤ 極楽寺跡

大字広原山王迫に慈光山極楽寺の跡があります。跡地の北東150mの場所には、五輪塔など数10基の墓碑が残されています。鎌倉時代の創建といわれ、鎌倉末期から南北朝期にかけて、慶覚法師の代に釈迦堂を建て、尊像を安置したと伝えられています。

現在、本尊の木造釈迦如来像などは地区の公民館に保管されています。



木造釈迦如来像 ➡

もくそうじゅういちめんかんのりつそう

⑥ 木造十一面観音立像（市有形文化財）

畑公民館には、鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて制作されたとされる木造十一面観音立像一軀が伝えられています。蓮華座に立つ190cmの一木造りの像で、髻長に仏面、外頭上面の二段に十一面をもち、垂髪を両肩に垂し、左手に宝瓶を取り、右手に錫杖を握っています。また、衣文の彫り口の深い刀技、あるいは蓮弁の形成等に鎌倉時代後期の特色が見られます。



うきはし（びたびたばしこせんじょう）

⑦ 浮橋（浸々橋古戦場）

「浸々橋」は、佐土原城下那珂と大字広原との境となる石崎川に架けられた橋のことで、現在その地には有喜橋（うきはし）が架かっています。

『日向地誌』によれば、「浸々橋」とは浮橋のことで、戦国時代に要害とするため、わざと橋を水面に浮かべ、兩岸の樹枝から鉄鎖でつなぎ、事ある時ははずせるようにしたと記されています。

慶長5年（1600）の伊東氏家臣稲津掃部助の宮崎城攻めの際には、この浸々橋付近で稲津勢と佐土原城より打って出た島津勢の間で戦闘が行われました。



すみよしそんこふん

⑧ 住吉村古墳（県史跡）

昭和14年（1939）と昭和19年に、芳土・島之内・広原一帯に分布する古墳・横穴群は、住吉村古墳として県史跡に指定されました（当初は国史跡となった蓮ヶ池横穴群も含んでいました）。前方後円墳2基、円墳2基、横穴63基が指定を受けていますが、現在は島之内の前方後円墳1基と芳土・広原地区の横穴40基が確認できます。

全長67mの前方後円墳である1号墳からは、円筒埴輪が採集されています。



ひろはらよこあなだいいちごう

⑨ 広原横穴第1号（市史跡）

広原の麓共同墓地の北斜面には、住吉村古墳として県史跡に指定されている横穴7基があります。広原横穴第1号は、この指定地の東側の隣接地で昭和52年に新たに発見されました。

玄室は、主軸の長さ250cm、幅205cmで、横断面はドーム状を呈しています。

この横穴の玄室の側壁には、線刻壁画が描かれています。東側壁に9体の人物像、西側壁に2体の人物像などが描かれています。壁画の構成に、葬列を推測させるような特異性が見受けられ、死後の儀礼に関して様々な研究課題を提示しています。



しまのうちはちまんじんじゃ

⑩ 島之内八幡神社

宇佐八幡宮領広原荘の鎮守として勧請されたと伝えられ、当初は広原八幡と称しました。

弘治2年（1556）の「土田帳」（予章館文書）によれば、八幡大宮司分として広原60町のうち田数2町3段・手水屋1ヶ所などが記され、広原荘の多くの土地が社領となっていたことがわかります。

慶長5年（1600）の伊東氏と島津氏の戦闘で戦火に逢い、社殿・宝物ことごとく焼失し、また、寛文2年（1662）の外所地震でも被災し、翌4年に再興したといわれています。

春・秋の社日に奉納される神楽については、その番付と神歌・唱教などが記された『神事縁起書』が残されており、その由来と内容を知ることができます。

民俗芸能 島之内八幡神社神楽



たいおうぜんじ

⑪ 泰翁禅寺

島津家15代当主、島津勝久（?-1573?）が伊東氏を攻めた際、戦没者供養のために一寺を建立し、その仏号（大翁妙蓮禅定門）を寺号としたと伝えられていますが、その真偽は詳らかではありません。京都東福寺乾峰土曇の法脈で、初代住職には喜山土慶が招かれましたが、江戸時代中期からは妙心寺派となりました。

元禄3年（1690）、島之内島津氏に3千石が分知されると、領内の菩提寺として位置づけられました。



⑫ 住吉神社

大阪市住吉区の住吉大社、福岡市東区の志賀海神社とともに住吉三社として有名です。寛政5年（1793）の『住吉大明神縁起』では孝安天皇（『古事記』『日本書紀』に第6代と伝える天皇）時代の創建と記されています。

祭神の三神（ウワツツオノカミ、ナカツツオノカミ、ソコツツオノカミ）は、イザナギノミコトが黄泉国から逃げ帰り、阿波岐原で裸ぎ祓うことで出現した神といわれ、『日向記』には「アワキカ原ノ波間ヨリ顕レ出シ住吉ノ神、住吉ノ里モチカウ見ヘワタリ」と記されています。

例祭日に売られる弾き猿は、かつては疱瘡除けのお守りでしたが、現在は開運・無病息災のお守りとして親しまれています。

